K－618

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第７集

遺跡詳細分布調査報告書(5)

1992年

長井市教育委員会

遺跡詳細分布調査報告書

1992年

長井市教育委員会

序

近年、全国的に開発事業と埋蔵文化財の保護・保存との関わりがよく問題になっている。特に開発の方は急激な場合が案外多いのに対して、文化財調査の方は専門家が少ないために、急速な対応がなかなか難しいのである。山形県の場合も、各教育事務所単位に適切に専門員が配置になっていればいいが、という要望が出ている現状であります。

長井市でもこれまでずっと継続して遺跡調査が進められてきているが、幸いこの面に関して造詣の深い方々がおられ、今回の調査でも指揮、指導して下さった佐藤正四郎先生をはじめとして、埋蔵文化財などに関心のあられるみなさんによって、このまとめができ上がりました。調査地域の住民のみなさんに種々ご理解とご協力をいただきましたことに対しても心から感謝申し上げます。

“ふるさとと歴史を大事にしない国は滅びる”といいますが、このことは一地方にも当てはまることと思います。私達の住む置賜盆地も悠久の昔から先人が営々と生活を築いてきており、様々な立地条件の中で工夫と努力を重ねてきた跡が見られます。

今日、文明・科学は私達の想像以上に飛躍的に進歩発達を遂げております。だが、今日と比較にならない未開の部分の多かった昔でも、人々はそれなりに豊かな文化をもち、潤いのある生活をしておったことに思いをいたす必要があります。

多くの方々のご努力によってでき上がった今回の調査記録も、遠い昔をしのび、現在をみつめ、昔と今を理解する上で大いに貢献されるものと思います。

人間の営みの悠久さを感じ知るだけでなく、よってきたるものの中から、今後を見通したり、また現代人として今後に遺すべきものは何かなどを考えてみたいものです。

平成４年３月

長井市教育委員会

教育長　鈴　木　榮　助

例　　言

1　本書は、長井市教育委員会が国庫補助を得て、平成３年度に実施した豊田地区を中心とする開発事業等に関わる遺跡詳細分布調査の報告書である。

2　調査期間は平成３年５月10日から平成４年３月31日までである。

3　調査体制は次のとおりである。

調査主任　佐藤正四郎（米沢女子短大講師）
調　査　員　岩崎　義信（長井市教育委員会生涯教育課文化係長）
調査補助員　高橋しのぶ（　　〃　　主事）
調査参加者　青木文雄、青木藤一、安部新一、飯沢太市、五十嵐康助、内谷重雄、梅津庄一、梅津美春、遠藤国栄、大場光雄、尾形一美、片桐義正、菅野重兵衛、寒河江茂、佐藤七夫、佐藤栄一、佐藤忠雄、佐藤勇一、斎藤　誠、清水仁三郎、鈴木　茂、鈴木四郎兵衛、鈴木幹雄、鈴木茂策、鈴木与五衛門、孫田八郎、高石喜栄、高石次郎、高橋金五郎、高橋政太郎、那須末吉、那須惣左エ門、本間金助、山口久吾、横山庄治、和久井富十夫
事務局長　竹田　欣助（生涯教育課長）
事務局次長　村上　和雄（生涯教育課次長）
事務局員　岩崎　義信（　〃　係長）
　〃　高橋しのぶ（（　〃　主事）

4　本調査にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

山形県教育庁文化課、手塚　孝、豊田地区公民館、豊田地区文化振興会、西根史談会、伊佐沢郷土史会、長井市農林課

5　挿図・付図の縮少はケケールで示した。

6　本書の編集は岩崎義信が担当した。執筆は岩崎義信・高橋しのぶが担当し佐藤正四郎が総括した。挿図・図版等の作成は吉田輝美の補助を得た。

目　　次

Ⅰ　調 査 の 経 緯 …… 1
　1　調査の目的 …… 1
　2　調査の方法 …… 1
　3　調査の経過 …… 2

Ⅱ　豊田地区の概要 …… 3

Ⅲ　調 査 の 概 要 …… 5

Ⅳ　遺跡の位置と現況 …… 11

Ⅴ　遺物について …… 19

Ⅵ　開発事業に係る分布調査 …… 27
　1　梨ノ木平遺跡 …… 27
　2　蔵高遺跡 …… 29
　3　小豆澤館遺跡 …… 31

Ⅶ　ま　と　め …… 35

挿図目次

第1図　分布調査遺跡位置図 …… 4
第2図　遺跡位置図 …… 11
第3図　遺跡遺置図 …… 13
第4図　遺跡遺置図 …… 15
第5図　遺跡位置図 …… 17
第6図　遺物実測図 …… 19
第7図　梨ノ木平遺跡概要図 …… 23
第8図　蔵高遺跡概要図 …… 25
第9図　小豆澤館遺跡位置図 …… 27
第10図　小豆澤館遺跡概要図 …… 28・29

図版目次

図版1　遺跡現況 …… 12
図版2　遺跡現況 …… 14
図版3　遺跡現況 …… 16
図版4　遺跡現況 …… 18
図版5　分布調査遺物 …… 20
図版6　分布調査遺物 …… 21
図版7　分布調査遺物 …… 22
図版8　分布調査遺物 …… 23
図版9　分布調査遺物 …… 24
図版10　分布調査遺物 …… 25
図版11　分布調査遺物 …… 26
図版12　梨ノ木平遺跡 …… 28
図版13　蔵高遺跡 …… 30
図版14　小豆澤館遺跡 …… 34

Ⅰ　調査の経緯

1　調査の目的

長井市の南部に位置する豊田地区は、近年時代の要求によって大型店舗の進出や企業進出が計画され、それらに伴う道路工事も数多くすすめられている。これらの開発事業に先がけて表面踏査を行い新規遺跡の発見につとめ、開発計画区域と遺跡の関係を明かにし、事前に遺跡の保護にあたることを目的とする。

また、周知の遺跡については試掘調査を実施、遺跡の範囲・性格・年代等を明かにし遺跡台帳の整備にあたる。

さらに、平成４年度以降に開発が計画されている周知の遺跡にたいしては、試掘調査・小規模な発掘調査を実施し、開発事業との調整をとると同時に、必要に応じて記録保存にあたった。

2　調査の方法

(1)　聞きとり調査

豊田地区の聞き取り調査を実施した。同地区の文化振興会や文化財の保護団体の方々を通じて、土地に伝わる伝承や田畑の耕作・土木工事における埋蔵文化財の出土状況等の情報を提供いただいた。また、土器や石器の所有者からは出土地や収集時の状況など詳しい情報の提供を受けた。

(2)　現地踏査

調査区域を泉・時庭・河井・今泉・歌丸の５地区に分けて現地踏査を実施した。事前の聞き取り調査をもとに地形や現地で聞いた情報をもとに新規遺跡の発見につとめた。周知の遺跡については試掘を行い、範囲と遺物包含層の確認を実施した。調査参加者が各区域の文化振興会の委員の方であったため細部にわたり踏査することができた。

(3)　試掘調査

平成４年度以降に開発事業が計画されている遺跡を対象としたが、開発が間近に迫り緊急を要する遺跡や、開発区域が広範囲に及ぶ場合は遺跡として登録されていない箇所についても試掘調査を行い保護にあたった。

3　調査経過

長井市教育委員会では、本年度から開発を担当する関係機関とのあいだで今後予想され

る開発事業にさきがけて埋蔵文化財に係るヒアリングを実施している。その内訳は次のとおりである。

種　　別	報告件数	現地調査実施件数	調査区分	備　　考
開発行為許可申請に係わるもの	2件	2件	試掘調査	
岩石採取に係わるもの	12件	1件	表面調査	
団体営農整備に係るもの	1件	1件	試掘調査	
広域農道に係る遺跡の範囲確認調査	1件	1件	試掘調査	
県道拡幅に係る遺跡の確認調査	1件	1件	表面調査	縄張図作成

また、豊田地区の現地踏査は12月3日から9日までの間に実施し、内容は次のとおりである。

12月3日　泉・時庭地区を踏査する。遠藤館、館之越、堂之越、検断屋敷、時庭館、を確認する。

12月4日　河井地区を踏査する。三間屋敷、茶臼館、西山、河井山古墳群、源徳原館を確認する。

12月5日　今泉地区を踏査する。蛇崩、北八ケ森、加賀塚、今泉金山、南八ケ森、清六清水を確認する。

12月6日　今泉地区を踏査する。安海壇、場場、今泉館を確認する。

12月9日　歌丸地区を踏査する。界斎、古屋敷、歌丸館（本郷館）、二ツ壇を確認する。

なお、現地調査の行程は下記の表のとおりである。

分布調査行程表

期日 内容	平成3年 10	11	12	平成4年 1	2	3
現地調査	22・23	19　28	18　21			
聞き取り調査		22				
現地踏査			3　9			
報告書作成						

II　豊田地区の概要

長井市豊田地区は、出羽丘陵の南端部にあたり、その南東部は川西町、南西部は飯豊町に隣接し、朝日山系及び出羽丘陵の扇状地前縁部である長井盆地の先端を成して、赤湯付近の三角州性低地につながるかたちで、東部一帯は丘陵地となっている。また当地域は、松川、白川の合流地点に位置し、それらによって形成された氾濫原や低い段丘が多くみられる。

更に、ここの表層地質には特に沖積堆積物が分布し、地盤が軟弱であるため、建造物の基礎地盤としては適さないが、土地利用としては集約的農業土地利用面が進んでおり、近年の河川改修や土地改良によってほぼ完全に農耕地としての整備がなされてきている。

農業は米作が大半であり、平地では水田、丘陵地にあってはぶどう等の果樹が栽培され、農地の高度利用が図られている。

本地区の行政区画は泉、時庭、歌丸、今泉、河井の５地区からなっており、国道287号線及び113号線の縦横断する地点にあっては、仙台市と新潟市を結ぶ路線の中間地点として、流通団地や住宅団地の整備など、最も都市的土地利用が見込まれる地域でもある。

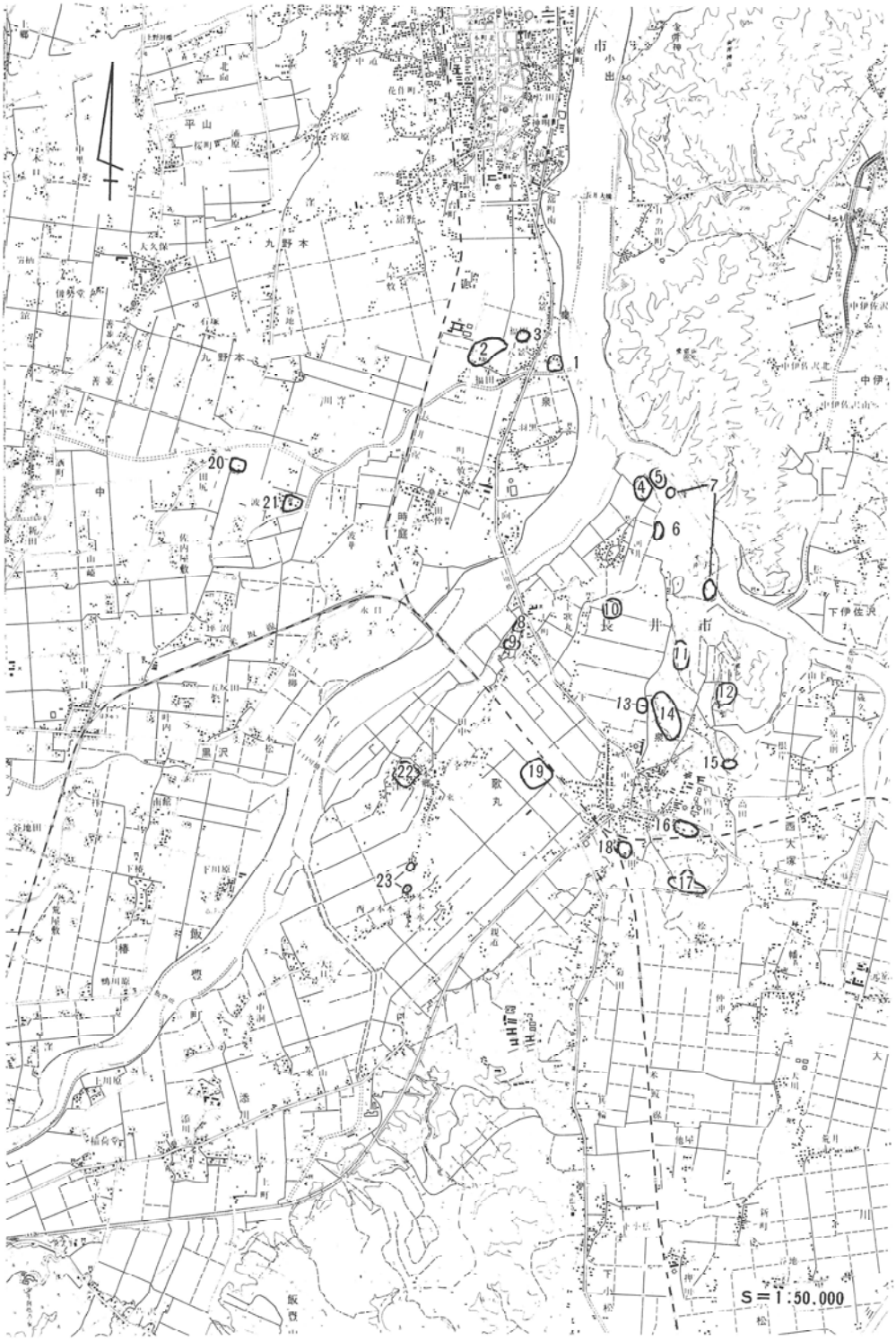
昭和53年度版の「山形県遺跡地図」には、豊田地区では泉の『館之越遺跡』、今泉の『加賀塚遺跡』、『今泉金山遺跡』の計３遺跡が登載されているが、その後の聞き取りや、今回の調査によって更に新たな遺跡が確認された。

これらの遺跡の立地状況を見ると、今泉丘陵並びに、丘陵西に分布する松川、白川の河成段丘上に点在しているが、段丘でも浸食を受けずに比較的台地状を残す場所に、今回は縄文時代の遺跡が発見され、平坦部は、土地改良によって破壊を受けてはいるものの、中世の館跡がみられ、『Ｕ字型』の溝や土塁などが残存している。

また、今回採集された遺物は奈良・平安時代の須恵器が多く、それらの多くはぶどう畑の開墾時に今泉丘陵地より出土したものである。

『加賀塚遺跡』（平安時代）や、現在に伝わる『成島焼』（江戸時代）にもみられるように、今泉付近には古くから良質粘土が採取され、丘陵地の地形を利用した窯場が設けられていたものと考えられる。地表面下２～６メートルに粘土層があり、中でも、深い層ほど粒子が細かく灰色が強い良質粘土である。

さらに、本地区東部にある河井山丘陵には、現在まで７基の古墳が確認されており、平成元年度から発掘調査がすすめられている。



第１図　分布調査遺跡位置図

III 調査の概要

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目	立地
1	館跡	遠藤館	長井市泉	中世	畑地 宅地	段丘
2	集落跡	館之越	長井市泉	縄文時代	墓地 畑地 寺院	丘陵
3	祭祀	堂之越	長井市泉	不明	原野	平地
4	館跡	三間屋敷	長井市河井	中世	水田	平地
5	館跡	茶臼館 (河井山遺跡群)	長井市河井	中世	雑木林	山頂
6	包蔵地	西前 (河井山遺跡群)	長井市河井西前	縄文時代	山林	段丘
7	包蔵地 古墳	河井山古墳群 (河井山遺跡群)	長井市河井	旧石器時代 古墳	雑木林	山頂
8	散布地	界斎	長井市歌丸	縄文時代	宅地	段丘
9	館跡	古屋敷	長井市歌丸	中世	水田	段丘
10	館跡	源徳原館	長井市河井	中世	原野 宅地	平地

遺　　跡　　概　　要	遺　物	備　考
国道287号線沿い東方60㍍ほどの所、福田川左岸の段丘に位置する。昭和40年代の土地改良で破壊を受けるが、人家の西側に高さ２㍍、幅４㍍、長さ15㍍の土塁が現存する。		新　規
昭和41年頃に土採りが計画され、一部緊急発掘調査を実施し、縄文中期（大木８ａ～ｂ）の遺跡として知られている。小丘陵上に位置し寺院・墓地・畑地となっている。	縄文土器片・剥片	既　存 No.１３６１
館之越の北東約60㍍に位置する一辺が15㍍四方で高さ1.5㍍の塚。北西部が0.6㍍くらい一段高くなっている。祭祀遺跡の可能性がある。		新　規
最上川と白川の合流点落合の南東付近に位置する。昭和40年代の土地改良時に、多くの面とりされた石が出土したという。現在も田の畦畔にその石が残っている。		新　規
河井山の北端に位置する。小高い山の山頂には二重から三重の空濠が巡らされている。すぐ下にNo.４三間屋敷があることから、山館と平館の関係が注目される。		新　規
河井山の西側、幹線水路沿いの段丘上に試掘を行ったところ、縄文土器片と剥片が出土した。包含層もしっかりしており、立地状件からして、貴重な遺跡ということができる。	縄文土器片・剥片	新　規
松川と白川の合流点近く、松川沿いに位置する。平成元年度より発掘調査を実施し、調査中である。現在７基の古墳が確認され、１～３号墳の調査結果によれば、５Ｃ末～６Ｃの古墳である。	刀子・土師器他	既　存
白川右岸、白川橋近く比高差４㍍ほどの段丘上に位置する。昭和26年頃畑から石器が出土したという。試掘の結果遺構は見られなかったが、付近より夏岩を採集。４㍍ほどの高台。	スクレイパー・剥片	新　規
歌丸の聖神社東側に位置する。上杉の家臣小島氏の屋敷跡と言われ南北方向に幅約２㍍ほどの堀跡が見られる。		新　規
河井山の南西、直線距離で約140㍍のところに位置する。西半分は昭和40年代の土地改良で消滅しているものの、北・南・東側には土塁が残り、北面は幅４㍍の堀も確認された。		新　規

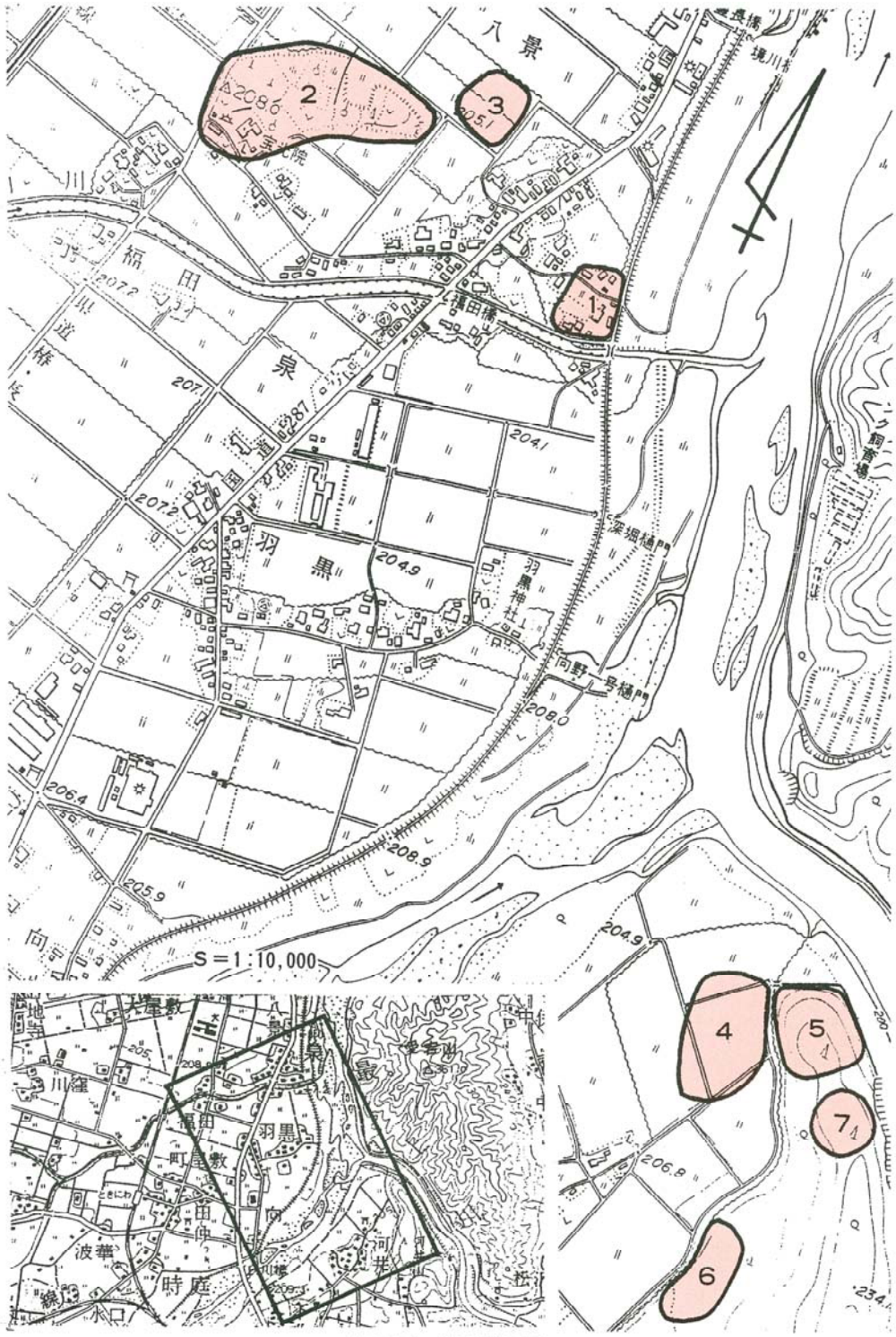
遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目	立地
11	窯跡	蛇崩	長井市今泉	平安時代	畑地	丘陵
12	散布地	北八ケ森	長井市今泉北八ケ森	旧石器時代	公園 山林	山頂
13	窯跡	加賀塚	長井市今泉	平安時代	水田	平地
14	窯跡	今泉金山	長井市今泉	平安時代	果樹畑 畑地	丘陵
15	祭祀	南八ケ森	長井市今泉南八ケ森	不明	山林	山腹
16	包蔵地	清六清水	長井市今泉	奈良時代	畑地	丘陵
17	墳墓	安海壇	長井市今泉	中世	原野	丘陵
18	塚	壇場	長井市今泉新田	中世	墓地	台地
19	館跡	今泉館	長井市今泉	中世	水田	平地
20	散布地	検断屋敷	長井市時庭	中世	水田 宅地	平地

遺　跡　概　要	遺　物	備　考
源徳原館の東約600㍍に位置する。ぶどう畑斜面より須恵器片多数を採取する。昭和32年の開墾時に多量の須恵器が出土していることから窯跡の可能性がある。	須恵器	新規
以前より石器破片が数多く採集されている。試掘では包含層を確認できなかったものの、道路の切り通しより石器片を採取した。	剝片	新規
豊田小学校の南約１㌔ほどの所にある。昭和52年の土地改良事業によって姿を消したが、当時は一辺が約５㍍の方形で、高さ1.2㍍の塚状の形態であったという。平安後期の窯跡。	須恵器	既存 No.１３６３
八ケ森から北に張りだした丘陵一帯は、ぶどう畑となっている。丘陵の西斜面には多数の須恵器片が散布し、焼土も見られることから一帯は大規模な窯跡である可能性がある。	須恵器	既存 No.１３６３
南八ケ森南東斜面に位置する。開墾の際、土中より男根が出土し、現在八ケ森地蔵尊に奉納されている。遺跡の時期や規模は不明である。	男根	新規
国道113号線沿いに位置する。南東に向けて傾斜した斜面は、涌水に恵まれ、井戸もあったという。湿地の斜面を試掘したところ、須恵器が出土した。	須恵器	新規
首塚・槍塚・車塚と、三箇所に分かれて塚があったといわれるが、昭和30年代の開墾時にぶどう畑になり、破壊を受けたが以前は高さ２㍍、周囲３㍍ほどの塚であった。槍塚跡には石が安置されている。		新規
米坂線北東沿いに位置する高さ1.5㍍、長軸43㍍、短軸42㍍の台地がある。法印英真氏の墓などもあり、中世の墳墓の可能性がある。		新規
今泉駅付近、北西部に位置する。大正９年鉄道造成の際、炭化木材が出土。付近の小字名にも西口・東口・稲荷堂・熊野林等残っている。昭和54年の土地改良で破壊を受けている。		新規
人家の西側に長さ10㍍幅５㍍高さ0.5㍍の土塁が残っている。更に西側100㍍の地点に約10㍍四方の塚があったという。しかし、昭和43年の土地改良で破壊された。		新規

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目	立地
21	館跡	時庭館	長井市時庭	中世	寺院 墓地	平地
22	館跡	本郷館	長井市歌丸	中世	宅地 水田 道路	平地
23	塚跡	二ツ壇	長井市歌丸西一本木	不明	宅地 道路	平地

遺　　跡　　概　　要	遺　物	備　考
寺の西と、北西部に高さ4㍍、長さ80㍍の土塁がある。寺の縁起は室町時代に遡るが、現在地に移ったのは約300年くらい前で、字名が「館」という本地に移ったという。寺は館跡の再利用か。		新　規
本郷虚空蔵菩薩付近。長井氏の家来、後に伊達氏の家来になった本郷歌野守義氏の館跡と伝えられている。堀幅約4㍍の堀跡が見られるが、堀が入り組んでいるところから、複数の館跡の存在が考えられる。		新　規
市道歌丸添川線沿い、山の神神社付近と、南へ200㍍ほどの所にそれぞれ塚があったが昭和40年以降、宅地造成の際に破壊を受けたが、径約10㍍、高さ約1.5～2㍍の規模を呈していた。		新　規

Ⅳ　遺跡の位置と現況



第２図　遺跡位置図

No.1　遠藤館遺跡近景

No.2　館之越遺跡遠景

No.3　堂之越遺跡近景

No.4　三間屋敷遺跡近景

No.5　茶臼館遺跡遠景

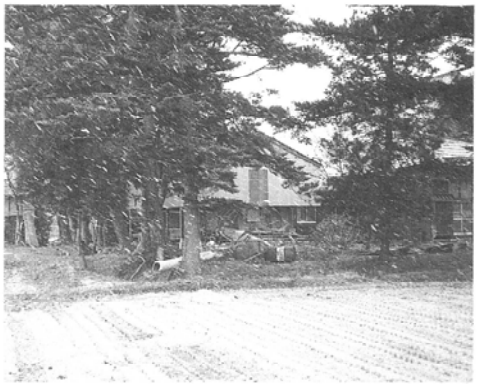
No.6　西前遺跡近景

図版1　遺跡現況

第３図　遺跡位置図

No.7　河井山古墳群

No.8　界斎遺跡遠景



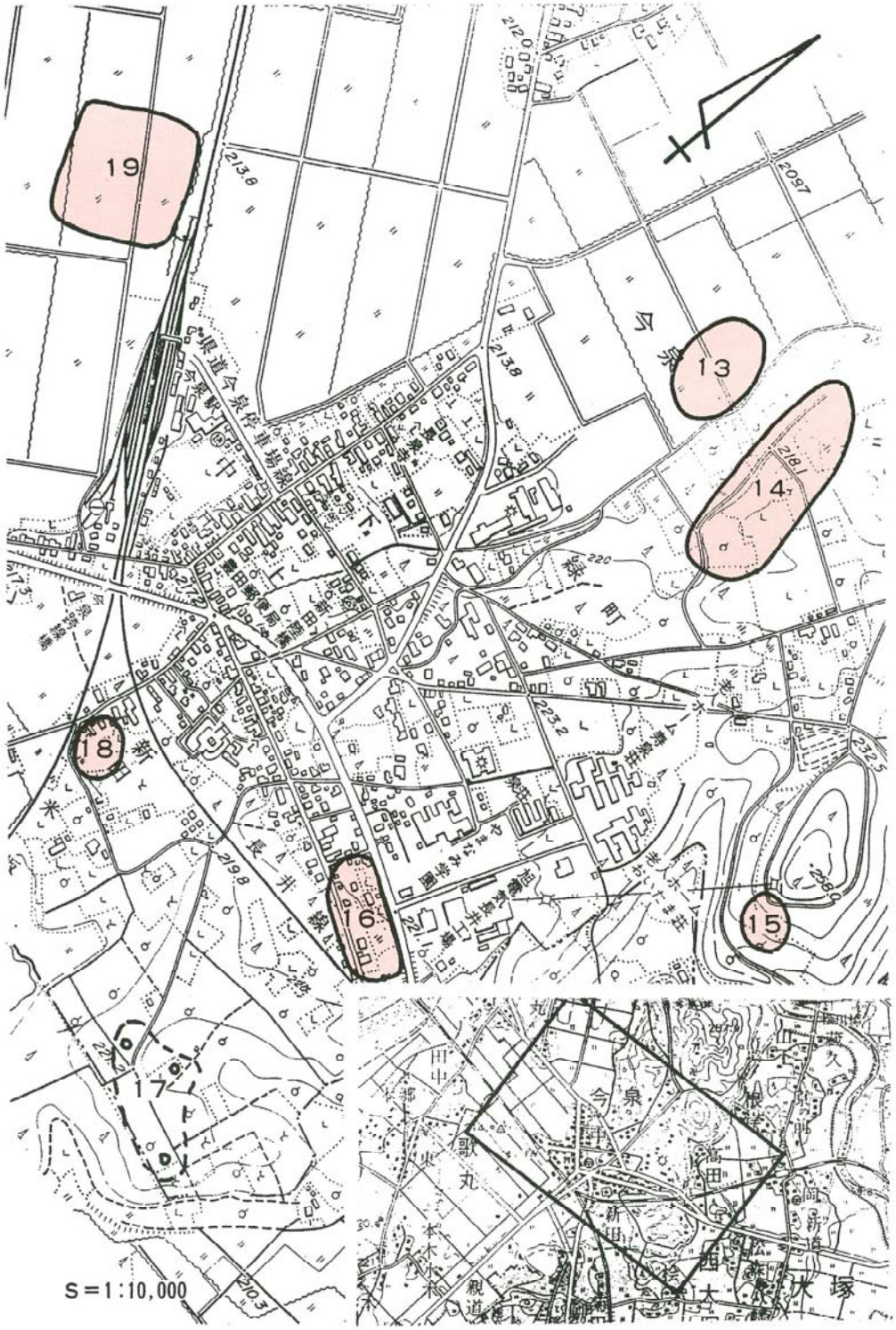
No.9　古屋敷遺跡近景

No.10　源徳原館近景

No.11　蛇崩遺跡近景

No.12　北八ケ森遺跡遠景

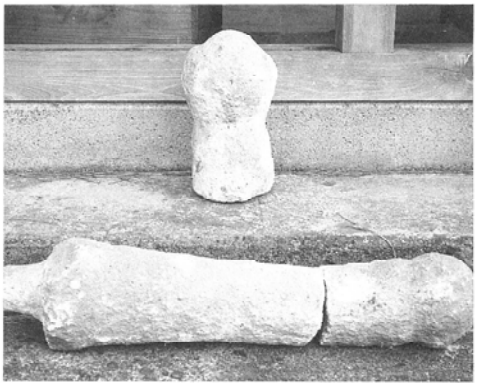
図版2　遺 跡 現 況



第４図　遺跡位置図

No.13　加賀塚遺跡近景

No.14　今泉金山遺跡近景



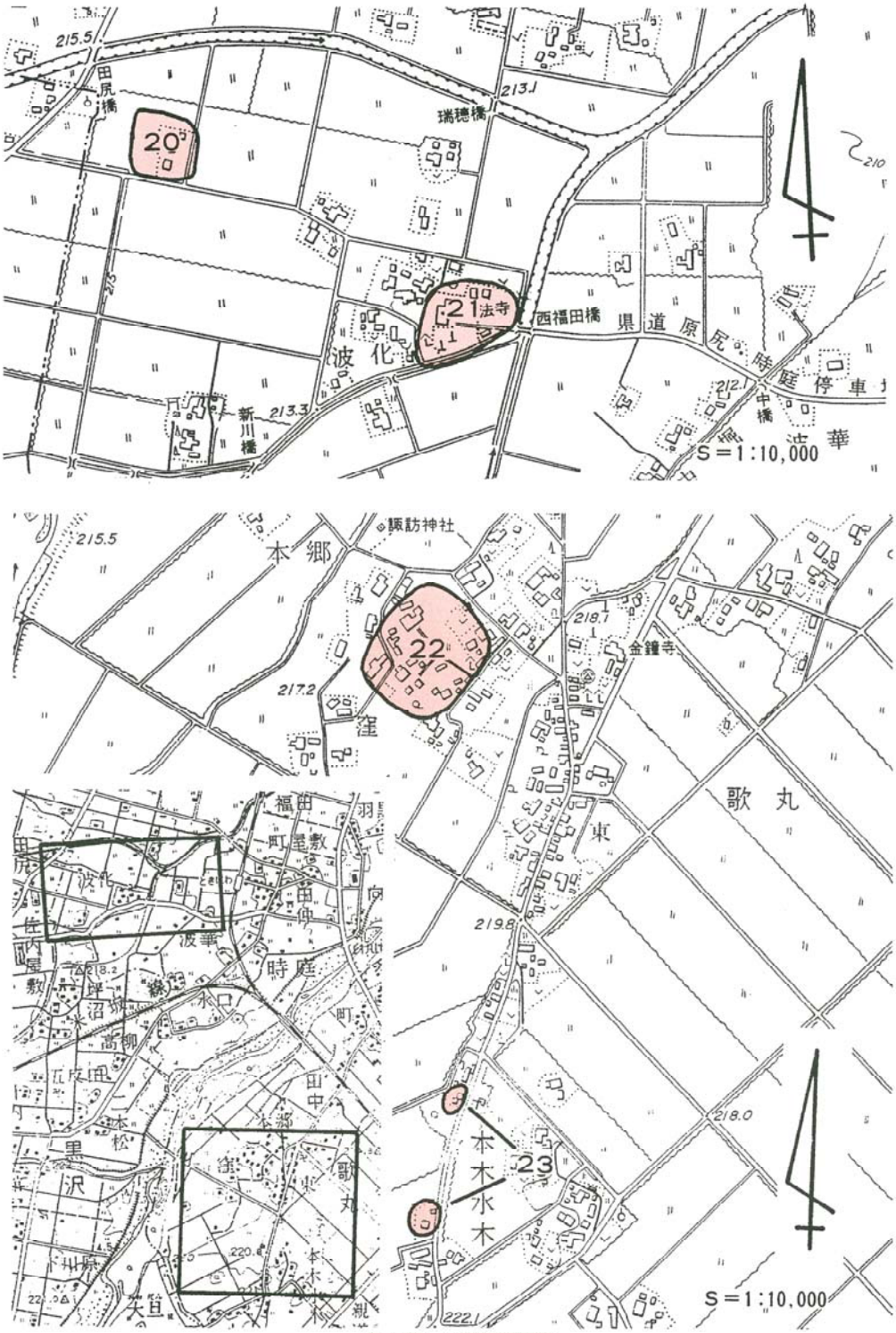
No.15　南八ケ森遺跡出土遺物

No.16　清六清水遺跡近景

No.17　安海壇遺跡近景

No.18　壇場遺跡近景

図版3　遺 跡 現 況


215.5
田尻橋
20
213.1
瑞穂橋
210
21
法寺
西福田橋
県道原尻時庭停車
波化
新川橋
213.3
212.1
中橋
波華
S＝1:10,000
215.5
本郷
諏訪神社
22
218.1
金鐘寺
217.2
窪
歌丸
東
219.8
218.0
本木
水木
23
222.1
S＝1:10,000
福田
町屋敷
波化
田中
波華
時庭
水口
高柳
田中
本郷
黒沢
歌丸
220.8
天旦

第５図　遺跡位置図

No.19　今泉館近景

No.20　検断屋敷遺跡遠景

No.21　時庭館遺跡近景

No.22　本郷館遺跡近景

No.23　ニツ壇遺跡遠景

図版4　遺 跡 現 況

V　遺物について

この度の調査で7遺跡から遺物を採集した。

No.2館之越遺跡（図版5）：試掘調査で縄文土器片・剥片が出土した。昭和41年の調査で縄文中期の集落跡が見つかったことから、この度の遺物の年代も同様のものであろう。

No.6西前遺跡（図版5）：試掘調査で土器片と剥片が出土した。土器は小破片で文様不詳。剥片の素材は玉随質。

No.8界斎遺跡（図版6）：スクレイパーと剥片2点で、石質は頁岩。石器の表面は磨滅している。

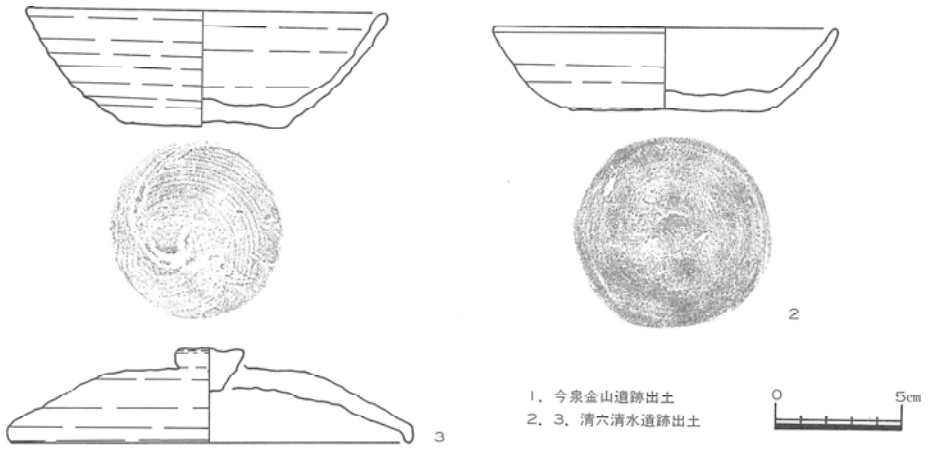
No.11蛇崩遺跡（図版6～7）：ブドウ畑の開墾時に須恵器が多数出土した。坏・甕の破片が大多数を占めるが、小型壺や横瓶の破片（図版7下右）もみられる。また、採集した坏は糸切り痕がみられるほか、低部径が大きいため底の広い坏が予想される。

No.12北八ケ森遺跡（図版8）：頁岩質の剥片と砕片はいずれも地山層から採集された。

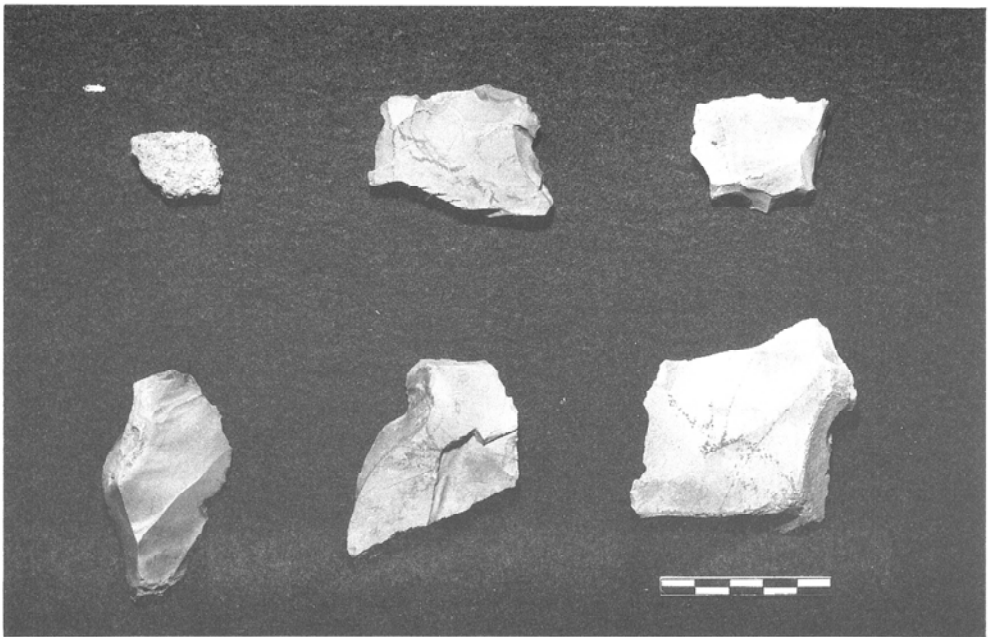
No.13加賀塚遺跡（図版8～9）：昭和52年、窯跡の発掘調査で出土したもの。須恵器の坏と甕が主体で胴下半部にヘラ削り調整痕が認められる。

No.14今泉金山遺跡（第6図1、図版9～10）：ブドウ畑の開墾時に須恵器片が多数出土した。坏・甕の破片が圧倒的に多く完形品もみられる。No.11蛇崩遺跡採集の坏をくらべると、低径もやや小さく整形法にも違いがみうけられる。

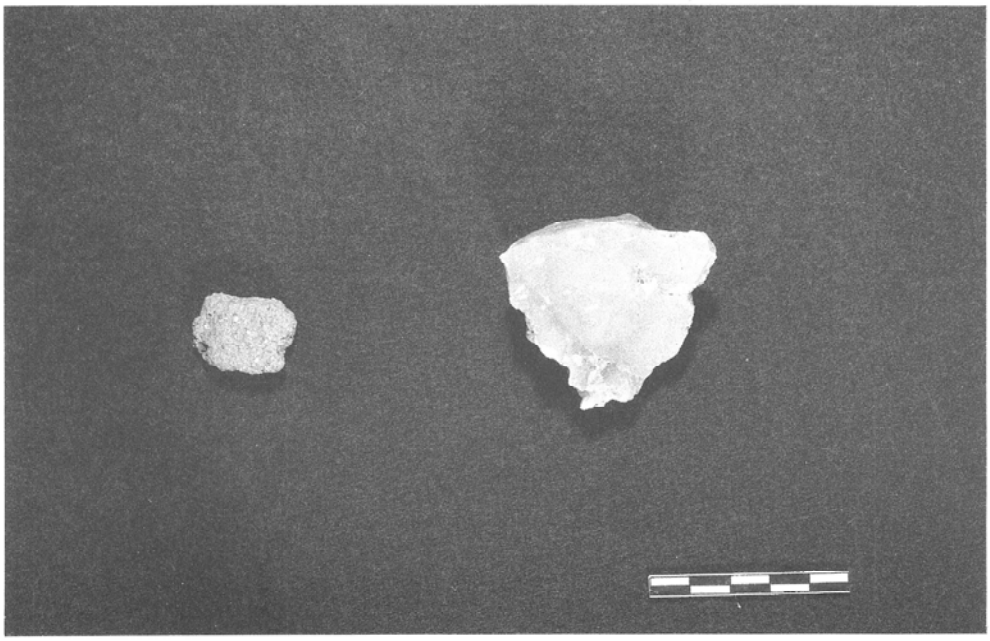
No.16清六清水遺跡（第6図2・3、図版11）：井戸跡といわれる箇所を試掘したところ須恵器の坏と蓋が出土した。坏は器高が低く器壁がやや厚みをおび、篦削り底となる。



第6図　遺物実測図

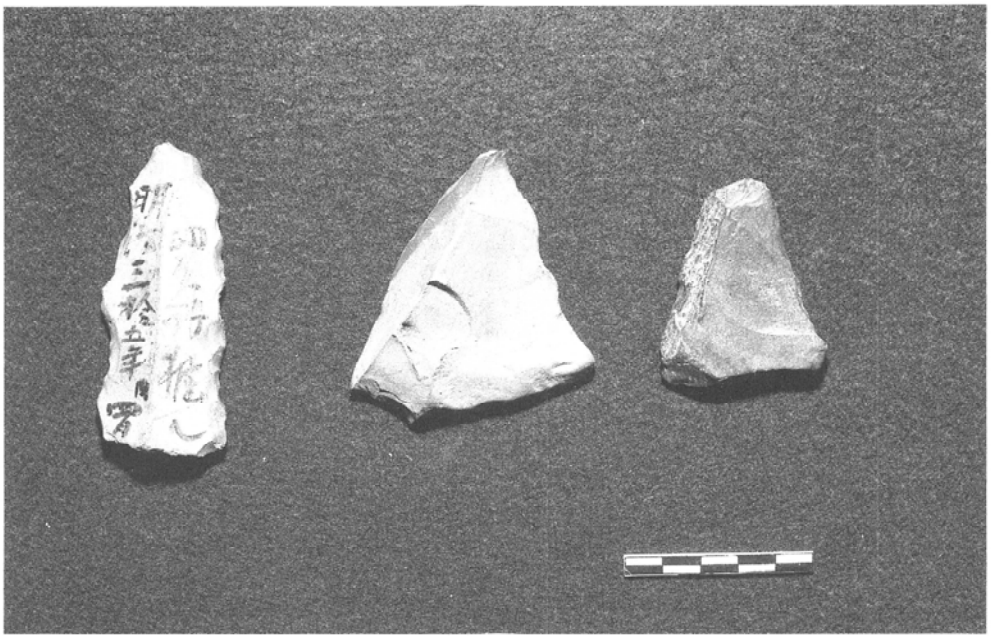


No.2　館之越遺跡遺物

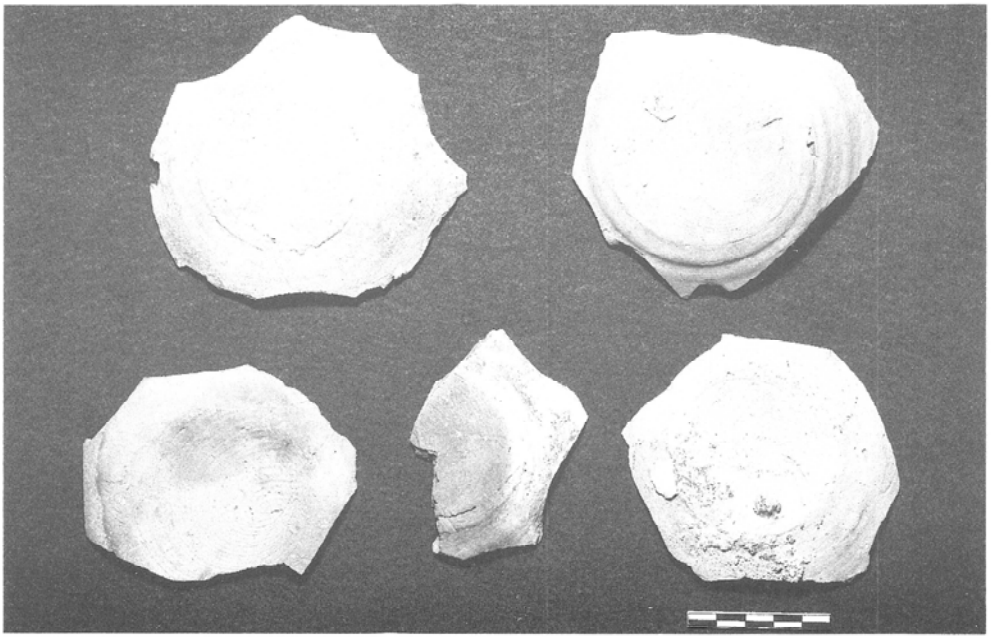


No.6　西前遺跡遺物

図版5　分布調査遺物

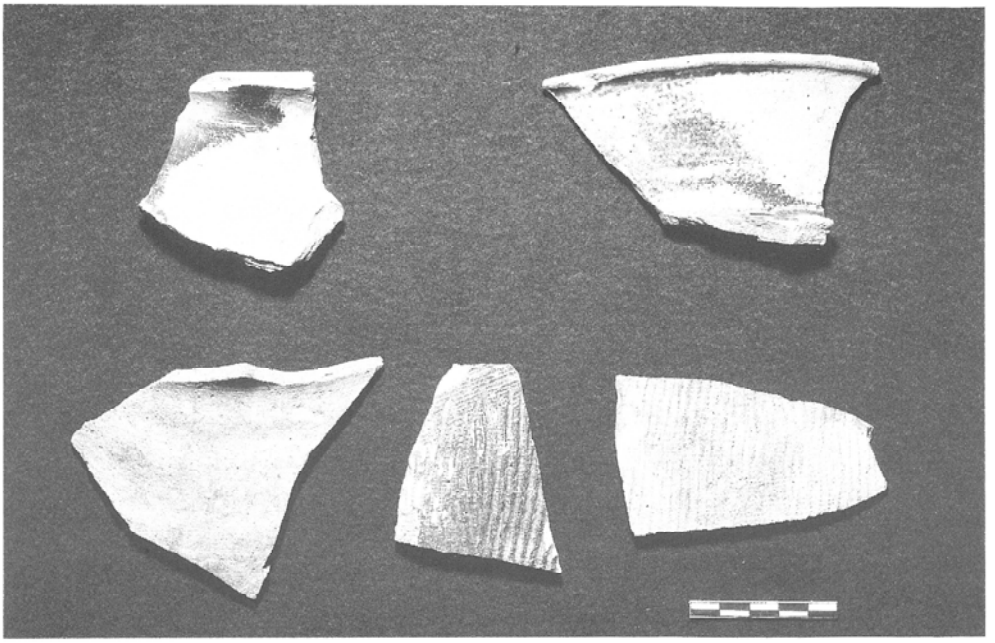


No.8　界斎遺跡遺物

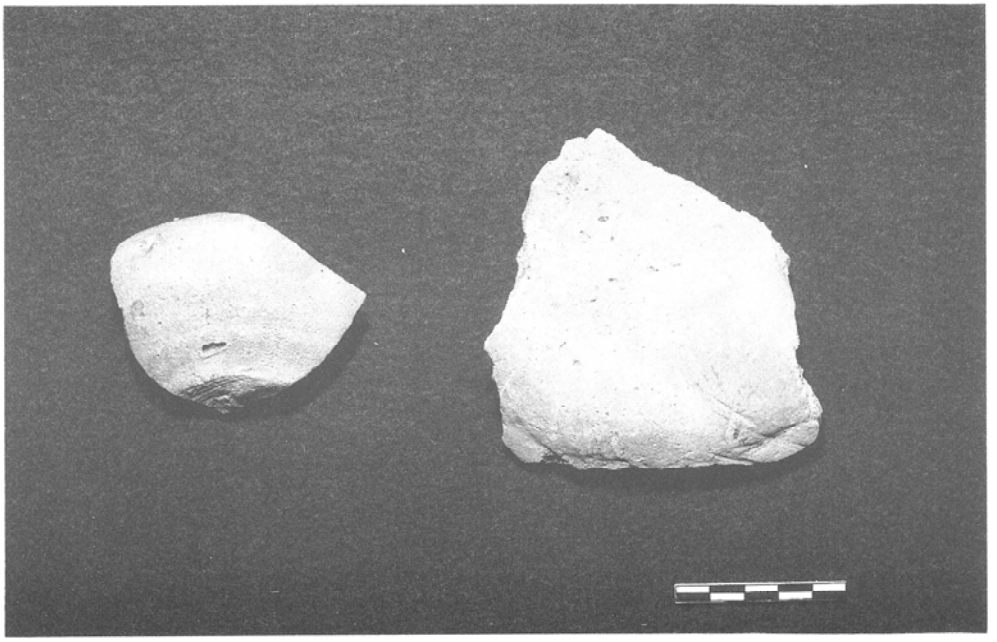


No.11　蛇崩遺跡遺物

図版6　分布調査遺物

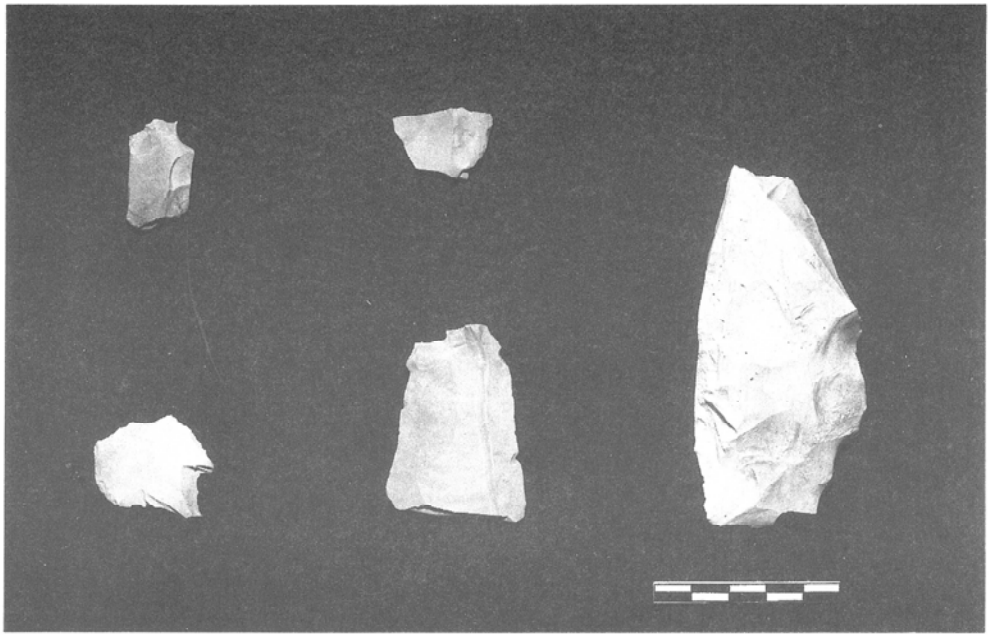


No.11　蛇崩遺跡遺物

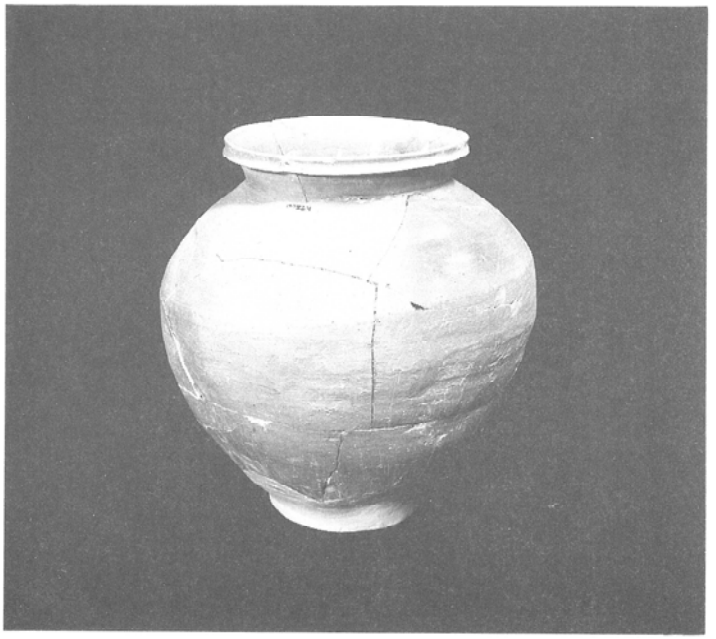


No.11　蛇崩遺跡遺物

図版7　分布調査遺物

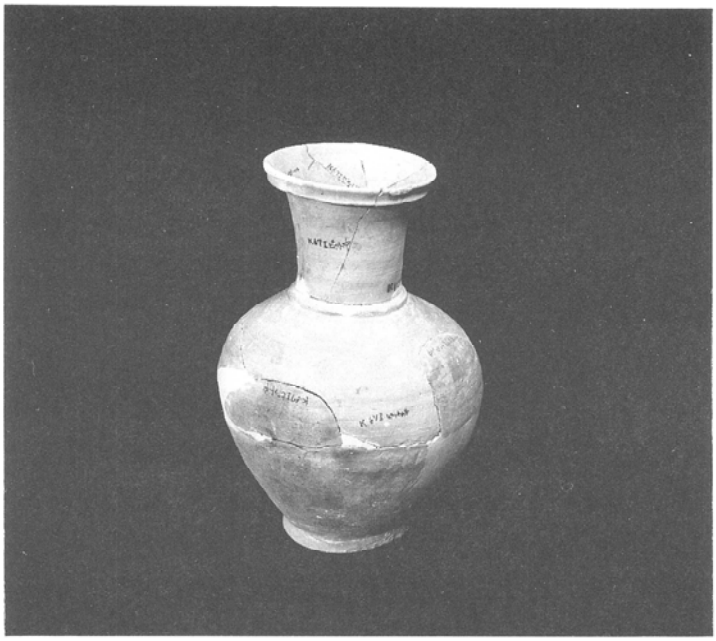


No.12　北八ケ森遺跡遺物

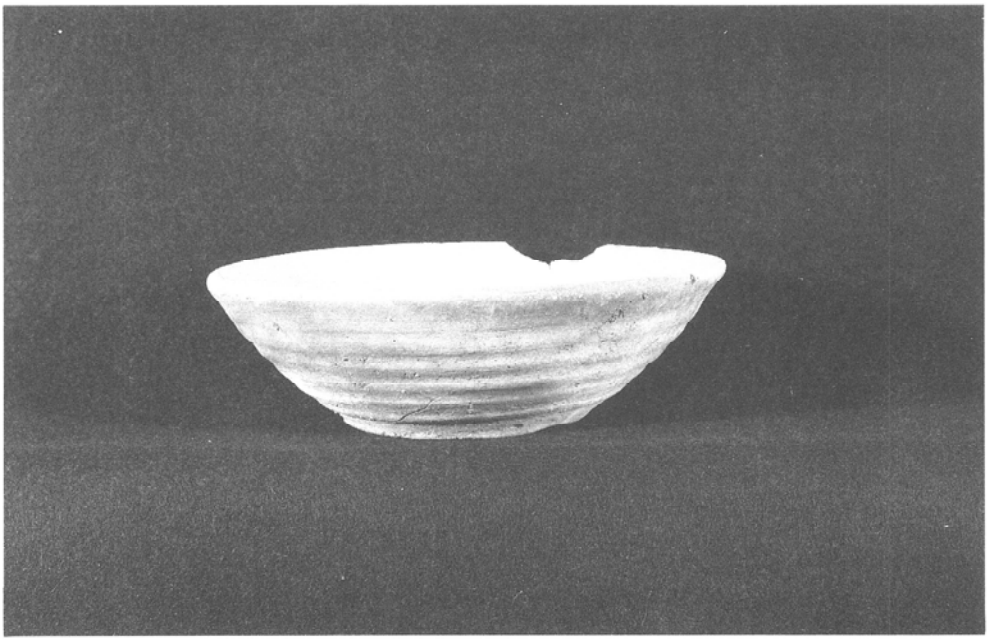


No.13　加賀塚遺跡遺物（昭和52年出土）

図版8　分布調査遺物

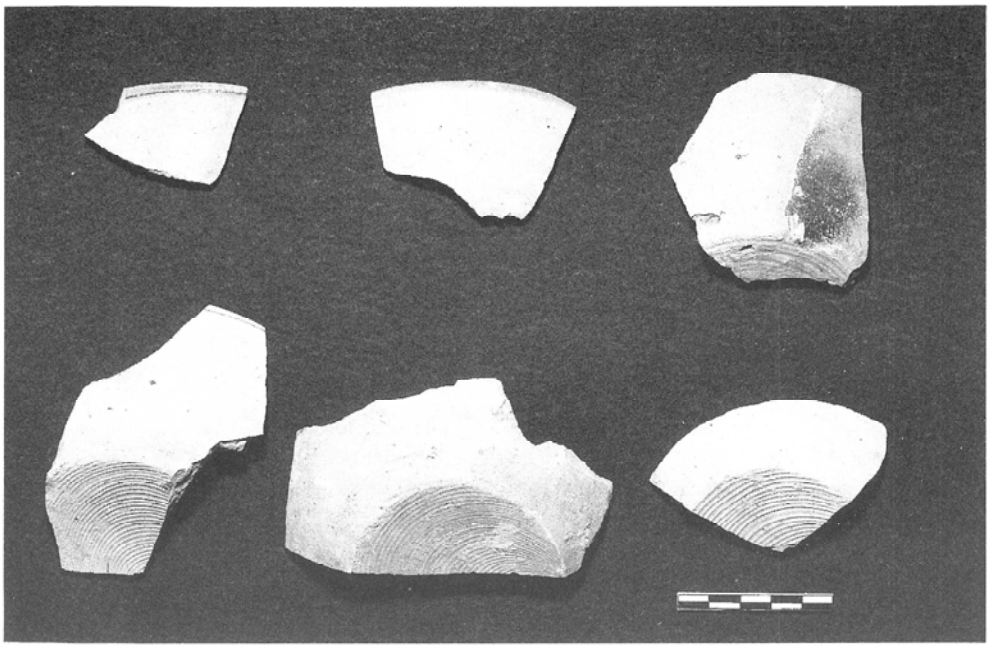


No.13　加賀塚遺跡遺物（昭和52年出土）

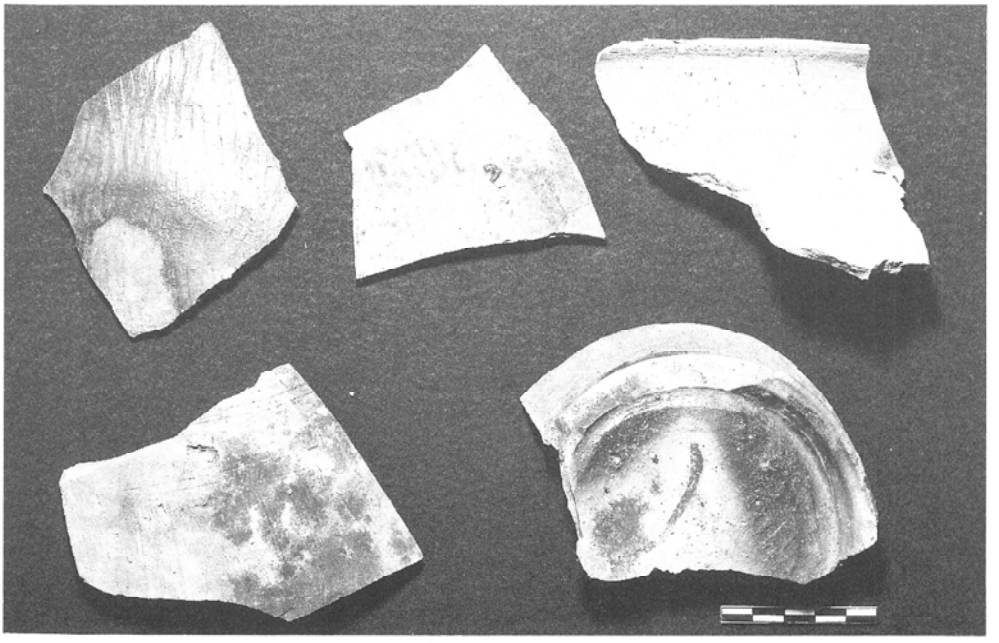


No.14　今泉金山遺跡遺物

図版 9　分布調査遺物

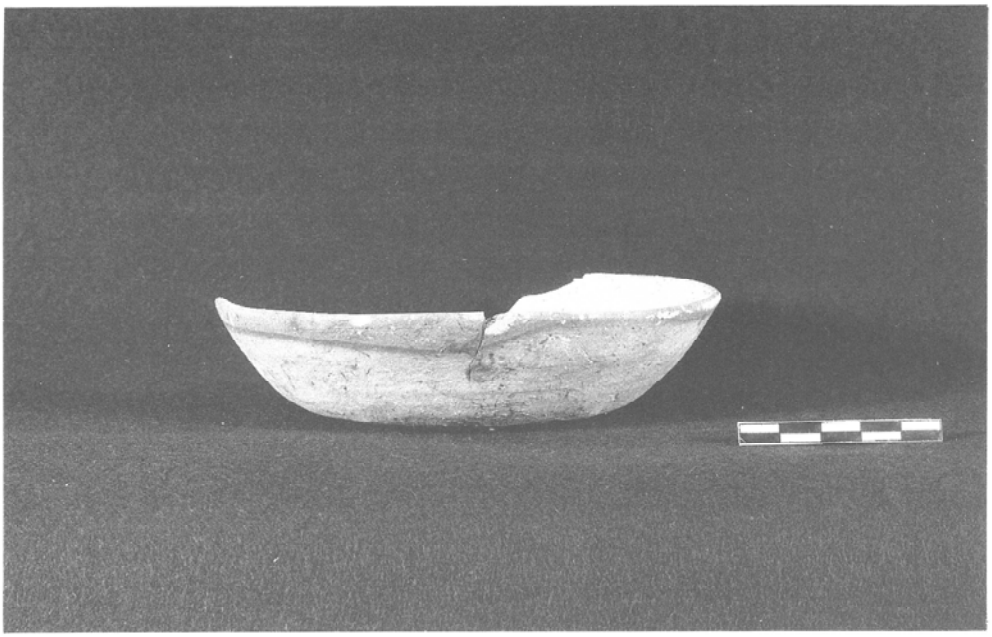


No.14　今泉金山遺跡遺物

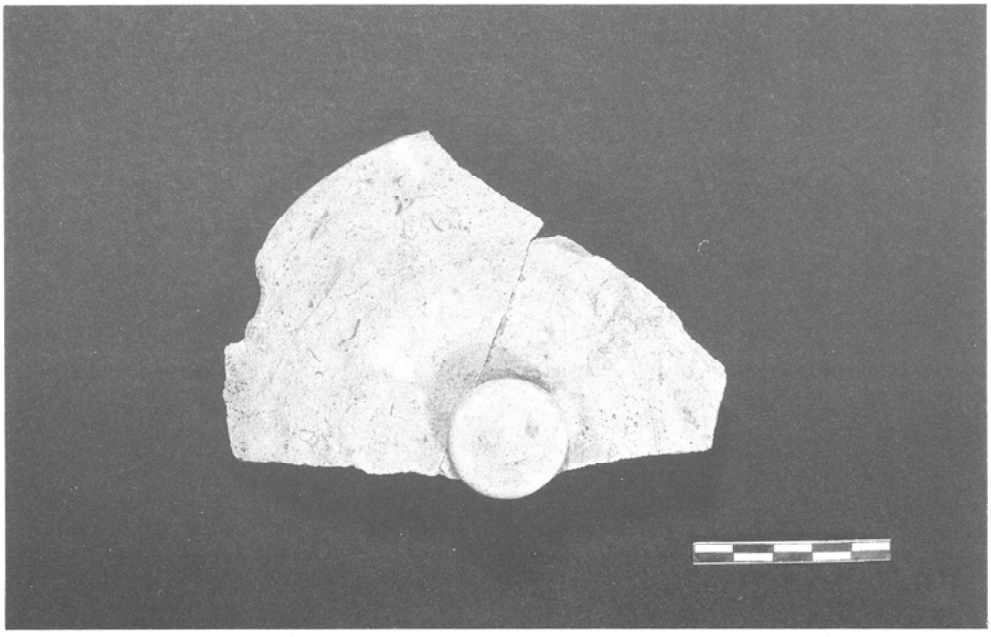


No.14　今泉金山遺跡遺物

図版10　分布調査遺物



No.16　清六清水遺跡遺物



No.16　清六清水遺跡遺物

図版11　分布調査遺物

Ⅵ　開発事業に係る分布調査

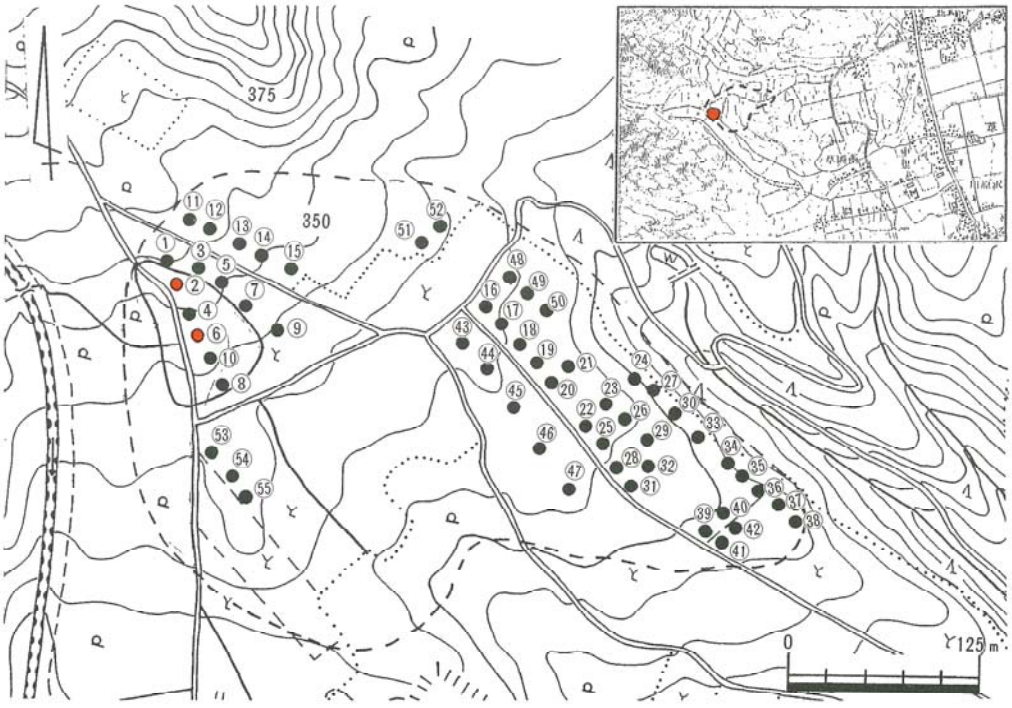
1　梨ノ木平遺跡

「古代の丘」の西側に隣接する遺跡で、岩ケ沢と久川にはさまれた東西に張り出した台地の西端に位置し、標高は、335メートルを測る。現在は桑畑・牧草地・畑地・杉林となっている。昭和57年の分布調査で発見され、縄文土器片・削器・凹石・磨石・剥片等を採集している。

この度、広域営農団地農道整備事業が実施されるにあたり、遺跡の範囲確認のための試掘調査を実施した。これまでは台地の微高地を中心に遺物の散布が見られたが、範囲確認を目的としたため試掘は台地全域を対象とし、１×１メートルのテストピットを55箇所に設定し地山まで掘り下げた。

その結果、遺物が出土したのは遺跡の西端の一部に限られたことから、これまで遺跡の範囲としていた箇所は開墾時に破壊を受けたと考えられる。すなわち、遺跡中央部では大規模な客土が確認され、周辺では削平を受けていた。また、他では耕作を受け包含層は確認されたかった。

したがって、梨ノ木平遺跡の範囲は概要図に示したとおりの範囲となった。



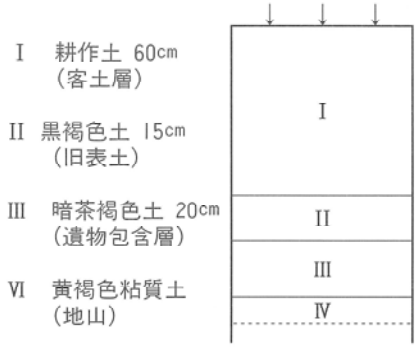
第７図　梨ノ木平遺跡概要図

遺　跡　近　景　（南から）

調　査　風　景

試掘土層断面（ＴＰ６）

出土遺物（ＴＰ６）



土層柱状図（ＴＰ６）

図版12　梨ノ木平遺跡

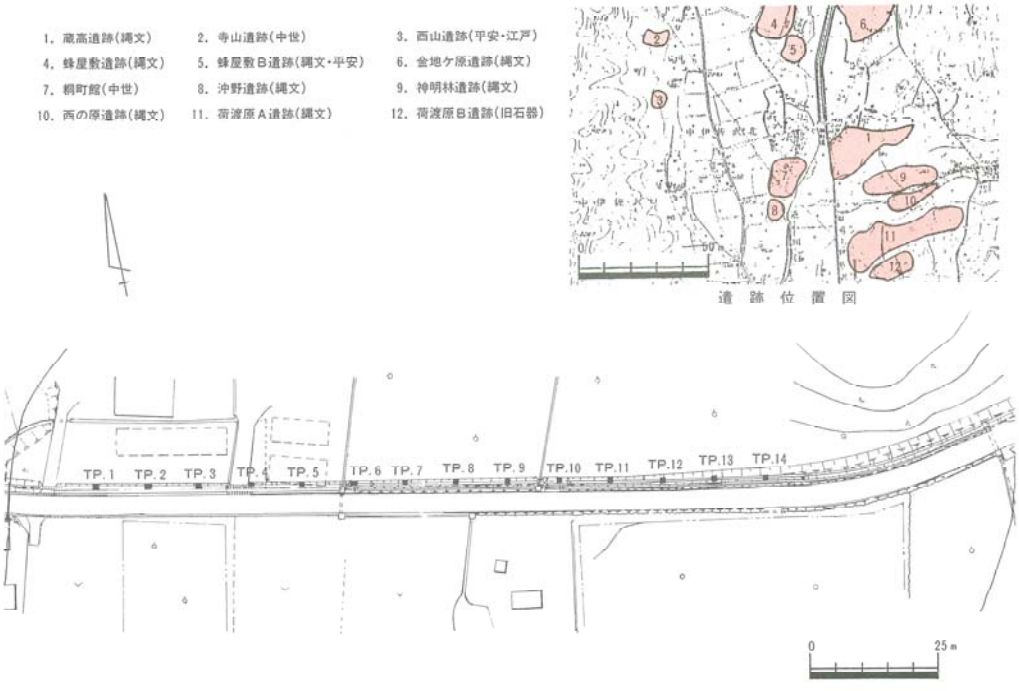
2　高蔵遺跡

遺跡は伊佐沢地区のほぼ中央部、逆川左岸の河岸段丘上に位置し、標高は 228メートルを測り畑地・果樹園となっている。近くには国指定天然記念物「伊佐沢の久保ザクラ」をはじめ数多くの文化財が伝わっている。埋蔵文化財は逆川段丘を中心とする遺跡群がふるくから知られていたが、昭和62～63年に実施した分布調査でその数も増した。本遺跡もそのとき確認したもので剝片が採集された。

この度、団体営農道整備事業が計画実施されるにあたり、事業との調整に資する目的から調査を実施した。

調査は農道拡幅ルートに沿って、１×１メートルのグリットを10メートル間隔で14箇所設定しそれぞれ地山層まで掘り下げた。分布調査時の聞き取りから段丘上に位置する遺跡は包含層の深さが60～90センチメートルに達するとの情報を得ていた。しかし、本調査では陶器片が３点出土したものの遺物包含層が明確でなく、所々に客土層が見られることから遺跡の北側は攪乱を受けている可能性がある。

したがって、この度試掘調査により遺跡範囲も道路の南側に変更するものとする。

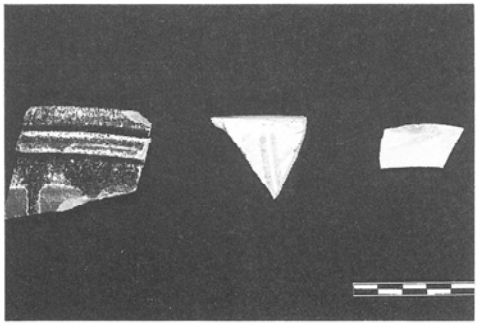


第8図　蔵高遺跡概要図

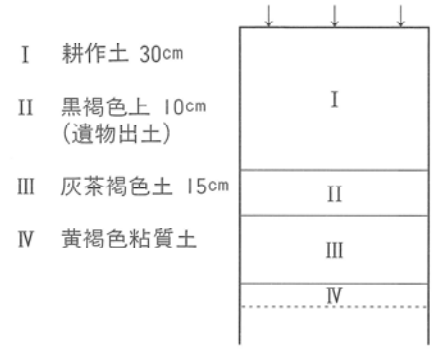
遺　跡　近　景　（南から）

調　査　風　景

ＴＰ．６　試掘土層断面



出　土　遺　物



No.5　土層柱状図

図版13　蔵　高　遺　跡

3　小豆澤館

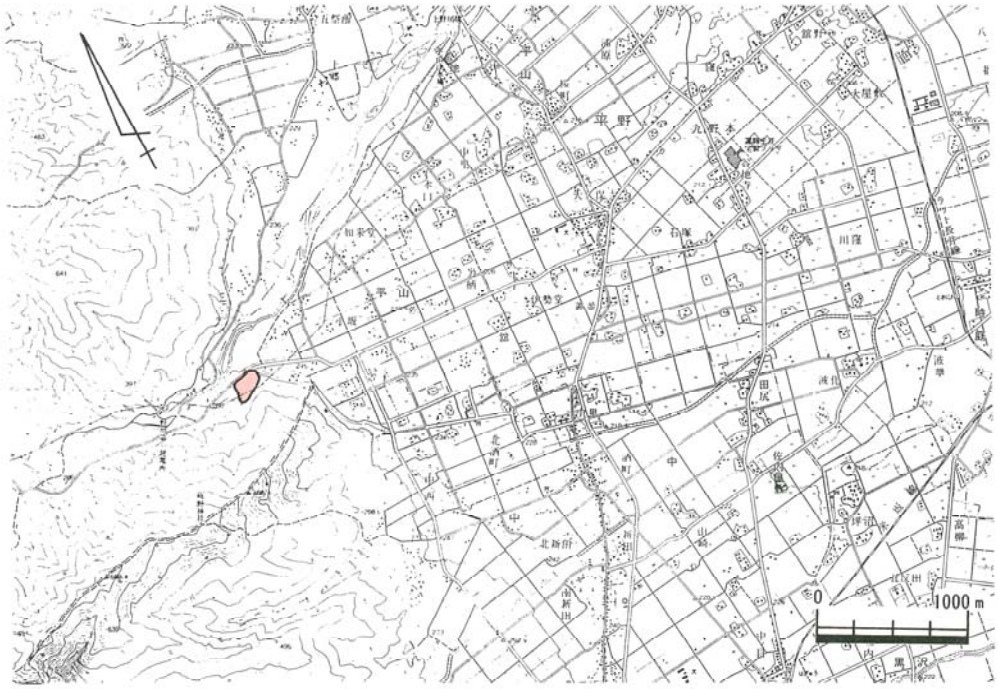
小豆澤館は置賜野川の右岸、道照寺平スキー場の東側に位置し、標高287メートルの山頂を中心に東・南・北側斜面に遺構が築かれている。この度の調査は、県道木地山・九野本線拡幅工事にさきがけて遺跡の範囲と概要を把握するために実施した。

山頂付近は東側に傾く緩斜面で、数ヶ所の廓（平場）が見られるが、西側は急峻な斜面となる。北側斜面は等高線の間隔からも窺われるように、急激な斜面となっているものの中腹には幅１～２メートルの帯廓が築かれている。また、２箇所にテラスも見られる。

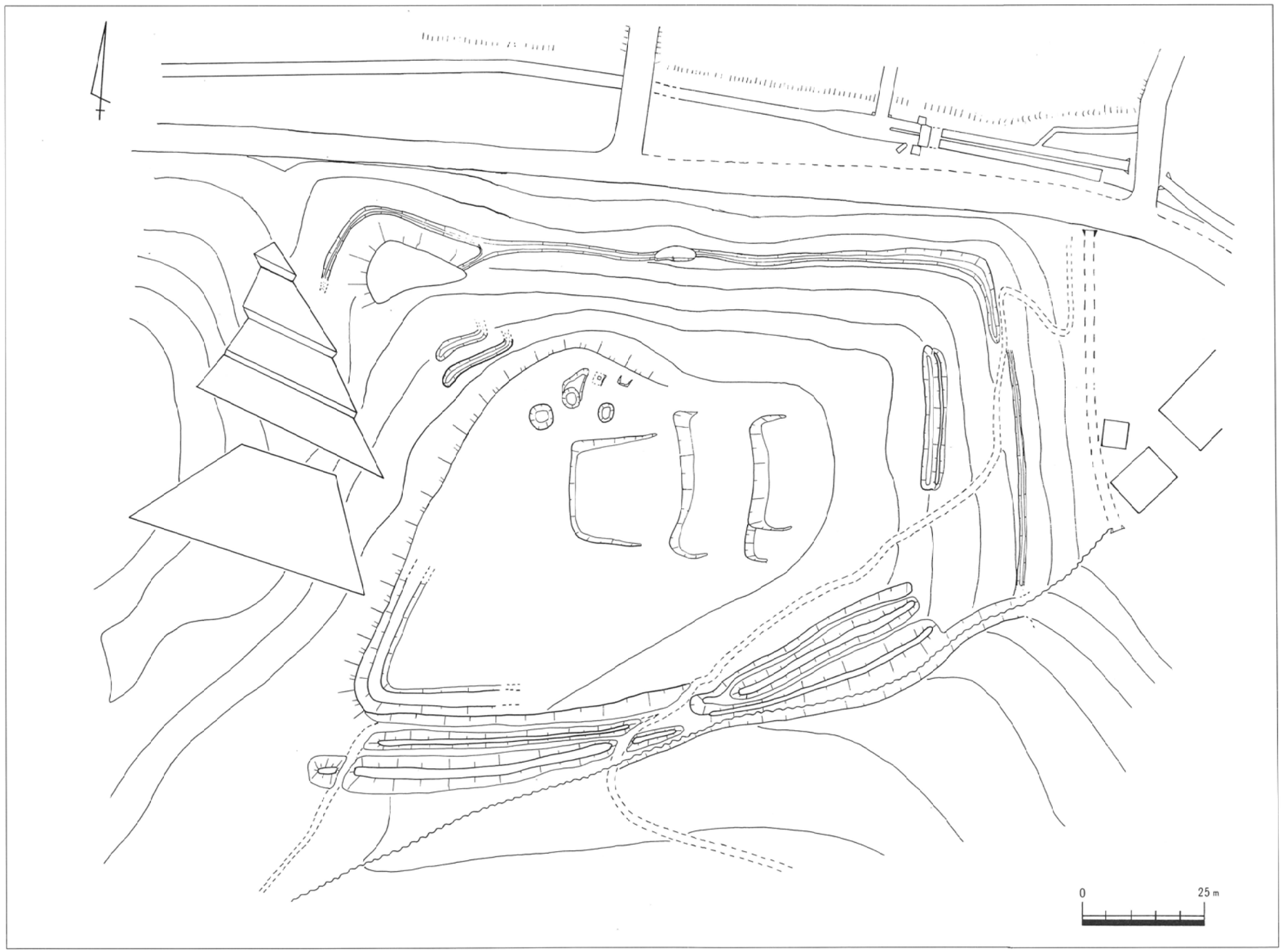
東斜面は下位に帯廓、上位に帯廓と土塁が築かれ、そこを縫うように熊野神社に向かう参道が通っているが、館跡の遺構を再利用した可能性も考えられる。

南側には深さ約２～３メートルの沢が走っており、隣接する山との境界線の役割を果たしているかのようである。また、沢と平行して幅約２～４メートルの２条の帯廓と土塁が併走し、その高低差は４メートルにもおよぶ箇所も見られる。

以上のことから、本遺跡は野川が形成した東にひらく扇状地の頂部に位置し、西に急峻な朝日山系を背後にし、北側には東西に流れる野川を配し、自然の要害をうまく利用した中世の館跡ということができる。また、付近には周囲に堀を巡らした平地の館跡が確認されており、小豆澤館と対をなして構築されたものと考えられることから、山の館と平地の館の組み合わせは今後の検討課題となろう。



第９図　小豆澤館位置図



第10図　小　豆　澤　館　縄　張　図

小 豆 澤 館 遠 景

小 豆 澤 館 帯 廓

図版14　小 豆 澤 館 遺 跡

Ⅶ　ま　と　め

1）　遺跡について

豊田地区を現地踏査し、あらたに23箇所の遺跡を発見することができた。遺跡を各時期ごとにまとめると次のようになる。

旧石器時代

No.７河井山遺跡群は平成元年から４年にかけて國學院大學により発掘調査が行われた。古墳の調査を実施したところ、封土や主体部それに周辺のトレンチからナイフ形石器やスクレイパー・剥片・砕片が出土した。１号墳～３号墳の周辺でも遺物が出土し、包含層もしっかりしており、河井山の山頂に沿って旧石器時代の遺跡が連なっているものと考えられる。No.12北八ケ森遺跡は河井山の南に位置し、標高267.9メートルを測る。山頂には「種松」とよばれるアカマツの大木があり、北八ケ森公園として市民に親しまれている。遊歩道脇の切り通しの地山層から剥片・砕片を採集した。河井山・北八ケ森両遺跡は最上川の左岸、白川の合流地点の丘陵上に位置していることから、置賜盆地の旧石器時代の立地を考える上でも貴重な遺跡である。

縄文時代

３遺跡が確認された。No.２館之越遺跡は昭和41年に一部緊急発掘調査が行われ、縄文中期の集落跡として知られている。現在は独立した小丘陵となっているが、言伝えでは丘陵の北を野川が南側を白川が流れ、付近は両河川の合流地点になっていたという。周囲との比高差は２メートルを測り、試掘調査を行ったところ遺物包含層もしっかりしている。遺跡の範囲を確認するのがこれからの課題である。No.６西前遺跡は河井山のふもとの最上川と白川の合流地点近くの河岸段丘上に位置する。試掘を行ったところ土器片と剥片が出土した。段丘に沿って遺跡が広がるものと考えられる。No.８界斎遺跡は白川右岸の河岸段丘上に位置する。梅津庄一氏所有の石器には明治35年４月と昭和26年の紀名があり、自宅の畑から出土したという。試掘を行ったが遺物の出土はなく、包含層をとらえることはできなかったが、立地条件からみても大規模な遺跡の存在が予想される。

古墳時代

河井山の尾根に沿いに７基の円墳が点在する。平成元年から國學院大學考古学資料館により１～３号墳の調査が行われ、５世紀末の年代が与えられている（1990年３月：國學院大學考古学資料館紀要第６輯、1991年３月：同紀要第７輯）。

平安時代

４遺跡を確認した。No.13加賀塚遺跡は窯跡で、一辺が５メートルの方形で高さ1.2メート

ルの塚状を呈していたという。昭和52年、土地改良事業に伴う緊急発掘調査が行われ須恵器の坏・甕・壺が多数出土し、平安時代後期の窯跡と判明した。No.11蛇崩遺跡、No.14今泉金山遺跡は今泉山の西斜面に位置する。両遺跡とも斜面一帯に須恵器片が散乱し焼土がみられること、重なった破片が多く出土することなどから窯跡と考えらる。No.16清六清水遺跡は国道113号線沿いの南斜面に位置し、涌水箇所を試掘したところ須恵器が出土した。窯跡とも伝えられるが、涌水を井戸跡と考えれば完形品の須恵器の坏や蓋が出土していることから集落跡の可能性もある。

4遺跡の遺物を比較すると清六清水遺跡（奈良時代後葉）、蛇崩遺跡（平安時代前半）、今泉金山遺跡（平安時代前半）、加賀塚遺跡（平安時代後半）の編年があたえられよう。

中　世

11遺跡を確認したが、そのほとんどが中世の館跡にかかわるものである。No.1遠藤館・No.4三間屋敷・No.9古屋敷・No.10源徳原・No.19今泉館・No.20検断屋敷・No.21時庭館・No.22本郷館は平地に築かれた館跡、No.5茶臼館は山館である。平館は土地改良事業や宅地造成等で破壊を受けている場合が多く、堀や土塁の一部が現存しているにすぎないがNo.19今泉館のように稲の生育時期によって旧堀跡が明瞭に観察されるという。No.17安海壇・No.18壇場は戦国時代にまつわる言伝えが残っている。

No.3堂之越遺跡・No.15南八ケ森遺跡・No.23二ツ壇遺跡は詳細な伝承は明かではないが、祭祀にかかわるものと思われる。

2）　開発事業との調整について

本市では宮遺跡・白山森遺跡をはじめ先学達により埋蔵文化財保護活動が実践され、多くの遺跡が救われてきた。しかしここ数年来の分布調査により200箇所におよぶ遺跡を確認していることと、年々開発の規模が大きくなり遺跡におよぼす影響も図りしれないものとなっている。

開発事業との調整はまだ途についたばかりであるが、行政機関内での横の連携はもとより、民間の方々にも埋蔵文化財の保護についてご理解とご協力をいただき、文化遺産を後世に伝えていければ幸いです。

最後になりましたが、この度の調査に参加ご協力いただいた方々には心から感謝申し上げます。

長井市埋蔵文化財調査報告書第７集

遺跡詳細分布調査報告書(5)

平成４年３月30日　印刷
平成４年３月31日　発行
発行　長井市教育委員会
山形県長井市ままの上５番１号
TEL　0238（84）2111
印刷　㈱サンノー企画印刷